

## 釧路に来て思うこと

今春から、魚類・両生類担当の学芸員として博物館に着任した野本和宏と申します。1980年、長野県生まれの現在33歳です。北海道の自然や野生動物に憧れて、大学進学を機に北海道へやってきました。大学時代には、北海道のあちこち旅をし、カメラを片手に野山に分け入り、野生動物の写真を撮影することに熱中したりもしました。そんな中で、ある川で野生のイトウに出会い、その美しさや神秘性に魅せられ、イトウの生態研究を始めることになりました。「幻の魚」と言われるイトウですが、「実際にはどこに、どれだけの数がいるのだろうか？」研究生活

のスタートはそんなシンプルな疑問が大きな動機となった気がします。私は子供のころ、「ムツゴロウ動物王国」をテレビで見ていたせいか、北海道というと、道東の自然を思い浮かべることが多かったように思います。そして、漫画「釣りキチ三平」の「イトウ釣り」編で主人公が全長2mのイトウと格闘した釧路湿原は、「イトウの聖地」として、鮮烈に記憶され、そのせいか、研究のフィールドとして根釧原野を選び、やはり就職先としても道東を強く希望していました。

今春、博物館に着任して早々にキタサンショウウオの担当として卵塊調査を実施することになりました。それまでキタサンショウウ

オは見たこともありませんでしたが、「湿原のサファイア」と呼ばれる産み立ての青白く光る卵塊を見たときの感動は今も忘れられません。

その後、6月に入り、春採湖のヒブナ産卵調査が始まりました。ヒブナの産卵場を造成するために、湖岸近くで作業していた時、ヨシ原の間にぼんやりと赤い物が見えました。それが、私と春採湖のヒブナとの初対面となりました。

釧路市は「阿寒」や「釧路湿原」という2つの広大な国立公園を抱える自治体で、海は国内屈指の好漁場でもあります。これからはそんな釧路の魅力を市民の方々や国内外に向けて積極的に発信していきたいと思います。野本 和宏

## 自己紹介～博物館へ着任するまで～

平成25年8月1日付けで採用され、鳥類と哺乳類を担当することとなりました。貞國利夫です。出身は岐阜県、海はありませんが日本三大清流の一つ「長良川」を始め、ライチョウの住む飛騨山脈など自然豊かな場所です。また、伝統漁法の鵜飼、世界遺産に指定された合掌造りの白川郷と歴史も古い土地です。

私は普通教科の勉強が嫌い、かつ生き物が好きだったため高校は岐阜農林高校の動物科学科へ入学しました。また将来については、生き物と関わることが出来る仕事に就ければと漠然と考えていただけでした。しかしある時から、通学路沿いの河川敷を飛び回る野鳥がふと目に入り始め、野鳥をもっと



観察したい気持ちが芽生えました。当初は一人で通学路や近くの森へ行き観察する程度でしたが、私が野鳥に興味を持っているとの噂を聞きつけた先生が野鳥の会の探鳥会へ連れて行って頂いたおかげで視野がぐっと広がり、そこからのめり込み始めたと思います。大学は野鳥の研究をしている先生の所を志望し、北海道の酪農学園大学へ進学しました。大学生活では野鳥に留まらず、アザラシやニホンザルなど哺乳類への調査も参加して興味の幅を広げました。卒業研究は、北海道大学の環境科学院で修士課程を修了するまでの4年間、カラスのねぐらや繁殖生態につい

て研究しました。修士課程時代は日の出から夕暮れまで一日中繁殖活動するカラスを観察し続けていることもあったのですが、調査地が北海道大学構内だったため、他の学生から奇妙な目で見られたことも多々あり、都市の調査地ならではの大変さも経験しました。その分、様々なカラスの行動を知ることができ、今後の仕事へも生かせるだろうと思っています。大学院を卒業後はいくつかの職場を経験したのち、縁があってこちらへ勤めることとなりました。今後の展望として、標本庫管理はもちろんのこと、観察会を野鳥以外にも哺乳類のイベント等も企画していきたいと考えています。地に足が着くまで至らない点が多々あると思いますが、どうぞよろしくお願い致します。貞國 利夫